

「不可解さ」へ向けて

——金光大神『お知らせ事覚帳』研究方法序説——

水 内 勇 太

第一章 本研究の視座

本論文の目的は、宗教の持つ「不可解さ」にどのように向かい合うべきか、という遠大な課題に対して、その研究の問題意識の表明と、その前提となる分析対象である史料の概要とその特性を示すことにある。本章においては、本研究の問題意識とその視座について示していく。

「宗教の「不可解さ」

宗教の持つ「不可解さ」、本研究の目指すところはそこに尽きる。この課題は、歴史学という分野においては、「宗教的な史料」そのものが持つ「不可解さ」をどのように考えるのか、どのように受けとめるか、という課題として姿を現す。歴史学は、そうした課題から目を背けてきたのではないか、もしくは、そもそもその課題に向き合うことは果して可能か、という問いこそが、本研究の根幹たる問題意識である。

「宗教的な史料」と我々が向かい合うとき、しばしば「戸惑い」を覚えざるをえない。それはその史料が我々の合理的解釈を拒むものであるからであり、定義付け、分節化を拒むものであるからである。そこには我々の理解を拒む——もし奇跡的に、辛くも理解できたとしても、その言語化を拒む——感情や感覚、体験、状況、ヴィジョンが厳然と存在している。それは、その信仰当事者によつてのみ言語化できるものであり、理解されるものであるのかもしれない、場合によっては、信仰当事者にとつても、言語化、そしてまた理解すらも不可能なものもありえるのかもしれない。

歴史学者はその避けがたい「不可解さ」を内包した「宗教的な史料」から、様々な——思想的、社会史的、政治的、経済史的、宗教史的、その他諸々の——歴史の意義を見出そうとする。その歴史の意義は、研究者の立場、その思想的・学問的潮流、時代性、地域性、そして、——広義的・狭義的、いずれにおいても——政治性によつて、それぞれ異なりえる。その歴史の意義によつて、「宗教的な史料」は読まれ、語られる。ここでは、その史料が持つ「不可解さ」は捨象され、その「歴史の意義」のみが抽出される⁽¹⁾。

レーウやワツハ、そしてエリアーデのような、いわゆる宗教現象学者⁽²⁾は、そうした歴史学者の姿勢を、還元主義的であるとして批判してきた⁽³⁾。彼等の見解においては、全人的な存在としての人間、その全体性や統合性が強調されており、「宗教性」とはその全人性を、そしてその本質を表するものとして規定される。そのような立場に立てば、「宗教的な史料」のもつ「不可解さ」は、その「宗教性」（もしくは「聖なるもの」）の中に内包されるものであるといえよう。しかし、我々はこうした現象学的な指摘にも、その問題性を見出さなければならぬ。「宗教性」を「宗教的な史料」の本質として位置づけ、「宗教性」の中に、その多様性——社会性・政治性・経済性などの様々な性質、そしてその「不可解さ」——が回収されていくような姿勢もまた問題にされなければならない。また、ここでは「宗

「教性」そのものを問う事、その自明性に異議を唱えることがなされえない。そうした批判は、宗教現象学に向けて、その史料考証の雑駁さへの批判と共に長らくなされてきたものである。しかし、近年その思潮が宗教概念論として結実していくにあたり⁽⁴⁾、その批判の対象は、宗教現象学に限らず、宗教研究そのものに向けての批判としてなされることによって、歴史学における宗教研究もまた、その立場を問い直されるに至っている。

「宗教的な史料」を、様々な要素に解体していく姿勢は、研究者の理解できるもののみを抽出して本質として位置づけ、その「不可解さ」をその本質に対する逸脱として、もしくは無意味なものとして排除しようとするものだといえる。一方で、「宗教的史料」の本質を「宗教性」と位置付ける姿勢は、その「不可解さ」を、「宗教性」というブラック・ボックスに押し込める事にほかならない。我々は「宗教的な史料」を研究するにあたって、もはやこの二つの道しか残されていないのだろうか。学術研究においては、その「不可解さ」は、無意味なものとして破棄されるか、「宗教」という言説によって隠蔽されるか、いずれかの方法しかありえないのであろうか。そもそも問題なのは、我々が、その破棄されない、隠蔽されない、言説化も分節化もなされない、剥き出しの「不可解さ」に対して、向き合うことは可能なのかという事である。そもそも、その「不可解さ」を我々は認識できるのだろうか。我々は、その「不可解さ」を前にして、サルトルのように「嘔吐」するか、ワイトゲンシュタインのように「沈黙」する他ないのではないだろうか。

〔本研究の視座〕

本研究は、以上のような歴史学、宗教学、宗教研究が抱える遠大な課題に、いわば「第三の道」を模索するものである。本研究においては、先に挙げた二つの道が共有できる中庸な「道」を想定するのではなく、その両者が見落と

しているものは何かを問い、それを丁寧になしていくことから始めていきたい。

さしあたって、本研究においてまずもってなせることは、個別の「宗教的な史料」にあたって、その「不可解さ」を、その内側から何か——たとえば歴史的意義や宗教性——に還元することなく、その輪郭を外側から丁寧に描いていくことである。先に批判した宗教の対する二つの態度、「不可解さ」を捨象する／隠蔽する態度において共通しているのは、「宗教的史料」の、「史料」そのものへの問いの欠落である。ある史料が「宗教的史料」として把握されるに際し、その歴史的意義や宗教性からその「史料」が問われる。こうした姿勢は、否定されるべきものではないが、その批判は試みられるべきである。すなわち、「不可解さ」の輪郭を外側から描くことの意味する所は、その史料そのもの、その史料自体を問うていく事である。その個別の史料そのものが「何であるのか」を徹底的に問い、「不可解さ」を囲い込んでいくこと、それが本研究の試みの第一歩であり、その立脚点である。

史料そのものが「何であるのか」、を問うという事は、その回答を何か一つに求められないとともに、その問い自体、複数の視座から行われる必要がある。すなわち、今現在我々研究者にとって「何であるのか」という事を問うだけではなく、その「宗教」の信仰当事者にとって「何であるのか」が問われねばならないし、現在に至るまで「何であったのか」が問われねばならない。どのように「読まれた」のか、「読まれている」のか、そして今後「読まれていく」のかが問われねばならない。そしてその問いは何よりも、その史料を記述した、その当事者まで、その史料が「書かれた」次元まで遡及されねばならない。

本研究においては、「宗教的な史料」として、近代民衆宗教・新宗教の代表的な一つである、金光教の教祖・金光大神の手による直筆史料、『お知らせ事覚帳』^⑤を対象として、果して、この史料が「何であるのか」という事を問うていく。本論文においては、その前提となる、本史料の概要と、その特性を示すことで、本史料を本研究の対象とす

る、その必然性を提示したい。

第二章 『覚帳』の概要

本章では、『覚帳』の概要について言及する。ここで述べるものは『覚帳』に関する非常に基本的な情報であり、それらの情報は教学研究によって、すでに自明である事柄も含まれるいる。しかし、ここで改めてその概要をまとめる事で、本史料が果して「何であるのか」という問いの前提を確立することを試みたい。

〔呼称と体裁および内容について〕

『お知らせ事覚帳』は、先述したように、金光教の教祖、金光大神（文化十一年（一八一四年）—明治十六年（一八八三年）による直筆史料である。本史料は、金光教の現行教典『金光教教典』に所収されており、その点において、金光教の教義の原典であるといえる。その呼称『お知らせ事覚帳』は、史料の表紙に書かれた⁽⁶⁾「御四被世事覚帳」による（以下、『覚帳』と略称）。

『覚帳』の原本は美濃半紙を二つ折りにしたものを料紙としており、寸法は縦十四、五センチメートル、横三十六センチメートル、厚さ九ミリメートル。表紙、裏表紙を含めた全七十二枚が右端和綴じとなっている⁽⁷⁾。

その表題通り、本史料の内容は金光大神の受けた神⁽⁸⁾からの啓示のようなもの⁽⁹⁾「お知らせ」⁽⁹⁾を、日付を付した形で書かれたものがその記述の中心となっている⁽¹⁰⁾。『覚帳』を用いた研究を行った教外の研究者である桂島宣弘も、

『覚帳』を、「金神（天地金乃神）のコトバを記した」もの⁽¹¹⁾、「赤沢文治（金光大神※引用者注）の受けた「神伝」

等を記録したものの¹³⁾などとしている¹³⁾。

ただし、桂島も「神伝」等」と記しているように、その記述は、単に「お知らせ」のみではなく、「お知らせ」に関わる金光大神の身の回りの出来事、少数ではあるが、具体的な「お知らせ」との関わりが不明瞭な事柄などにも及ぶ。その記述から、金光大神本人の日常生活や家族、親類、信徒、近隣の住民やその他様々な人々の動きもうかがえ、日付を付した体裁と相まって、一見読者に日記のような印象を与えるといえるかもしれない¹⁴⁾。

ただし、日付が付されているとはいっても、日記のように日々一定のペースで綴られたものではない。記事が数日集中して書かれ、その後一か月以上記事が書かれない事が多く、そのペースが完全に一定になる事はなかったといえる¹⁵⁾。

「お知らせ」に付された日付に従えば、表紙に記された日¹⁶⁾同様、安政四年（一八五七年）十月十三日からその記述がはじまり、帰幽の十九日前である明治十六年八月二十一日が付された最後の日付となる。ただし、『覚帳』の執筆開始時点を考察した藤井潔の論考によれば¹⁷⁾、『覚帳』の執筆が開始されたのは慶応三年（一八六七）から明治元年の間とされており、それまでの記述はその執筆開始時点にまとめ書きされたものであるとされる。そしてそれ以降はリアルタイムに近い形で執筆されたという。この『覚帳』の持つ、この執筆過程の複数性は、『覚帳』の持つ特性として後述するが、執筆期間としては、慶応三年頃から明治十六年とすることが出来るだろう。

〔保管と認知および教学研究について〕

『覚帳』は金光大神帰幽後、その四男¹⁸⁾である金光萩雄（金光教第一代管長）のもとで保管されてきた。しかし、その存在は教団関係者にもほとんど知られていなかったとされる。『覚帳』同様、金光大神の手によるものとされ、

『教典』にも所収されている「金光大神御覚書」または「金光大神覚」⁽⁹⁾（以下、『覚』）については、昭和二十八年に刊行された伝記『金光大神』⁽¹⁰⁾において、「金光大神の事蹟に関する主たる典籍」として取り上げられるなど、早い段階から一般信徒にも認知され⁽¹¹⁾、戦後、教学において、いち早くその研究が行われた⁽¹²⁾。昭和四十七年に『金光大神覚』として、写真版に翻刻文・解読文を付したものが金光教本部教庁から刊行され、昭和五十八年には『教典』に所収されるなど、長らく金光教の教義の原典として認識されてきた。

また、教外においても、『覚』は民衆宗教・新宗教研究者によって、その研究資料として用いられてきた。まず、近代民衆宗教研究の嚆矢とされる村上重良は、『覚』の解読文を『日本思想体系六七 民衆宗教の思想』⁽¹³⁾に所収し、さらにその解読文に自ら現代語訳を付した『金光大神覚 民衆宗教の聖典・金光教』⁽¹⁴⁾も昭和五十二年に刊行している。その後、『覚』その他教団関係諸史料を用いて研究を複数の著作としてまとめている⁽¹⁵⁾。宗教学者の大家である島蘭進は、著作としてまとめられたものはないものの、『覚』を徹底的に読み込む事で、他の研究とは一線を画するような一連の論文を発表している⁽¹⁶⁾。また、小沢浩もその代表的著作の中において『覚』を用いた研究を行い⁽¹⁷⁾、桂島宣弘も、同様の論文を多数発表し、それらを所収した著作を二つ刊行している⁽¹⁸⁾。以上のように、『覚』は、金光教研究において、長年にわたり、その研究史料の中心に位置していたといえる。

それに対し、『覚帳』は、昭和五十一年十一月に、金光教学研究所⁽¹⁹⁾が金光教本部当局から解読作業の委託を受けるまで⁽²⁰⁾、教外はおろか教団内部においてもその存在が知られていなかった。その後、教祖百年大祭が行われた昭和五十八年に刊行された『金光教教典』（以下、『教典』）にその解読文が収められることにより、ようやく、一般信徒をはじめ、教外の研究者にもその全容が明らかになったのであった。教学においてはいち早くその研究が行われ、その視点も多方面にわたる。その成果の蓄積は紀要『金光教学』などからうかがい知れる。

その一方、教学における研究の蓄積に対し、教外の研究の数はあまりに乏しいと言わざるを得ない。『覚帳』を用いた研究としては、桂島による一連の研究⁽⁸¹⁾が唯一見られるのみであり、教学研究に応えられような教外の研究が待たれる。

また、唯一見られる桂島の論考についても、あくまで『覚帳』を「用いた」研究であり、『覚帳』そのものを問おうとするものではない。『覚帳』という史料が、果して「何であるのか」という問いが看過されているといえるのである。こうした視点は、実は、長年の研究の蓄積を持つ『覚』研究に関しても同様に欠如している⁽⁸²⁾。その原因は天理教研究において島菌が指摘した、教外の研究が、教学の研究成果である史料に対して、あたかも自明のものとして用いる、という史料への「無批判さ」にあるのではないだろうか⁽⁸³⁾。これは、教学の史料研究が批判されるべきであるということの意味しているのではない。すでに述べたように、教学においては『覚帳』（『覚』も同様）が果して「何であるのか」という問いを繰り返しなしている。そうした議論を看過して、『覚帳』もしくは『覚』を「用いて」研究をなしている「無批判さ」こそ批判されるべきなのである。

以上、『覚帳』の概要について、その名称と体裁、大まかな内容、史料をめぐる現状などについて述べた。本研究において重要な点は、『覚帳』という史料が、非常に「新しい」史料であり、現在も尚、教学において、『覚帳』が果して「何であるのか」という議論がさかんに交わされている点、教外における研究にそうした視点が欠けている点である。教学の議論⁽⁸⁴⁾を大いに参照し、さらに参画していけるような研究をなしていく必要がある、さらに、その研究状況自体が、先述した信仰当事者にとって「何であるのか」という問いに重大な意味を投げかけるものであるといえよう。

第三章 『覚帳』の特性

次に、本研究の視座から、『覚帳』の持つ特性について言及したい。概要同様、これらの特性についても、すでに教学研究により指摘されている点が多く含まれるが、再度本研究の前提として、その位置づけを図りたい。

「宗教的自叙伝」

まず、第一にその特性としてあげられるのが、『覚帳』という史料が、金光教という一つの宗教の教祖自身によって記述されたという点である。ここではまず、この特性を「宗教的自叙伝」として指摘した、金光教学研究所嘱託の研究者であった荒木美智雄の論考を参照したい⁽³⁵⁾。

荒木は、『教典』が刊行され、『覚帳』が一般信徒や教外に認知された昭和五十八年（一九八三年）に「宗教的自叙伝としての『金光大神御覚書』と『お知らせ事覚帳』——その宗教的意味について——」⁽³⁶⁾という論文を教学の紀要『金光教学』に寄せている。荒木は、『覚帳』について、同じく金光大神の手による『覚』とともに、以下のように述べている。

筆者は、『覚』と『覚帳』の研究のために、世界の創唱宗教の中に、教祖の直筆になる自叙伝を探し求めたのである。しかし、数多くの聖伝や、他者による「教祖の自伝」は存在しても、また、聖伝や教語、手紙の類の中に、教祖の自分自身についての言明が視かれることがあっても、金光大神自身の手になる『覚』や『覚帳』のよ

うな、まとまった自叙伝はまだ今日になるまで発見されていないのである。典型的に言えば、教祖の「宗教的自叙伝」は教祖に於る教祖、教祖自身にとつての教祖の立場、教祖の、集団に還元されない立場を露わにするものである⁸⁷⁾。

荒木はシカゴ大学においてエリアーデを師事しており、エリアーデの『世界宗教史』についても、一部その日本語訳を行っている⁸⁸⁾。日本において、荒木は数少ないエリアーデ直系の宗教学者であるといえるだろう。しかし、それゆえに荒木は、E・リーチらの文化人類学者によつて「不当な歴史、不当な民族学、不当な心理学」⁸⁹⁾と批判されたような、史料分析の操作性や選択性、その「マクロな視点」など、「エリアーデ流」とも評されるような視座を継承しているともいえる。また、第一章で述べたようなエリアーデの宗教現象学的アプローチを引き継ぐ荒木の議論においては、「宗教的」という概念が固有性と自明性をもつて語られ、そこに批判の余地を残さない。加えて、この論文は『教典』の刊行と同年、教学研究の中でも最も早い段階でその論文化がなされたものであり、他の研究に比べて、『覚帳』についての史料的考察がどこまで深くなされているか疑問が残る。

このように史料そのものに対する問いをあたかも等閑視しているかのように思えるにも関わらず、『覚帳』が「何であるのか」という問いにおいて、荒木の指摘は非常に示唆的であり、その核心を突いている。

荒木によれば、『覚帳』および『覚』の「宗教性」は、教祖金光大神にとつてのそれと教祖没後のそれとは大きく異なっている⁹⁰⁾。金光大神にとって両史料は「宗教的自叙伝」であり、金光大神没後の教団の担い手たち、あるいは教団にとつては、「御直筆」、「根本典籍」あるいは『金光教教典』の最重要部分である、と荒木は指摘している。

荒木のいう「宗教的自叙伝」という概念については非常に興味深く、またその検討が必要であるが、ここでまず重

要な点は、教祖にとつての『覚帳』と、教団・信徒にとつての『覚帳』がその性質を異にする、という指摘である。この相違点は、教外の研究者にとつても当然無関係ではない。教学研究の成果をそのまま「史料」として用いている教外の研究においては、まずもつて『覚』『覚帳』が「何であるのか」という問い自体が看過されており、教祖にとつての『覚帳』『覚』との間に相違があるどころか、そもそもその依つて立つところがないといえる。その相違はむしろ断絶とも呼ぶべきものであるといえるだろう。勿論、いかなる研究においても、その研究対象との間には何がしかの断絶がありえ、その研究はある種の跳躍を伴わなければなるまい。しかし、ここでは、その跳躍を試みる前に、眼の前にある断絶について再考を試みたい。

「書く」と「読む」の断絶

その断絶とは、まず、荒木が指摘しているように、それが「自叙伝」であるという点によるものである。『覚帳』は、先述したように、基本的には金光大神の自己の「お知らせ」という体験が記述の中心となっている。執筆者である金光大神がその体験の当事者である以上、その性質は我々にとつてのそれと、金光大神にとつてのそれと圧倒的に異なる。「自叙伝の作者の直接的経験の完全な理解を許されるものは、作者以外に誰一人としていないと考えられる」⁽⁴⁰⁾と荒木が強調するように、その記述は、我々の理解を拒むような「不可解さ」が伴わざるをえない。

しかし、更に本研究で注視しなくてはならないのは、金光大神がその「書き手」である、という点である。この点は、指摘するまでもないほど自明なことであり、また、先の「自叙伝」であるという指摘がある以上——自身ではなく他者による「自叙伝」など原理的にはありえないのだから⁽⁴²⁾——問う必要はないように思える。しかし、金光大神がその「書き手」であるという点は、その内容が「自叙伝」である、という以前に問われるべき問題である。そこに

は、「書く」と「読む」という行為の間の断絶がある。研究者は、どうあっても「読む」という立場に立たざるをえない。その点においては、教内／教外の区別も、信仰／非信仰の問題も問われるものではない。我々は『覚帳』を、様々な見解を参照しながらも、「書き手」である金光大神の意図を想像しながらも、自らの解釈によって「読ま」ざるをえないのである。

ただし、一方で、この「書く」と「読む」という行為の断絶は、「書き手」である金光大神その人においても同様でありえる事にも注意したい。すなわち、「書き手」である金光大神は、同時に「読み手」でもありえるのである。金光大神もまた「読み手」という立場に立たされる以上、我々同様、『覚帳』を自らの解釈によって読まざるをえない。この「読む」という地平においてこそ、荒木の指摘している断絶について、異議を唱えることが可能になる。すなわち、「自叙伝の作者」である金光大神にとっても、そこに「読み」による解釈が伴う以上、「直接的経験の完全な理解」など許されないのである。

こうした「読む」地平に立った研究は、教学研究所の早川公明によってすでになされている。早川は、「『覚書』「覚帳」は、今やそれ自身の自立性・自律性を具えた、教祖自身にとっても一人の他者に比肩し得る人格を有する存在として押えられる必要がある」として⁽⁴³⁾、執筆者である金光大神と『覚帳』および『覚』を一旦引き離し、金光大神を「意図を作品に向ける作者の面のみでなく、むしろ結果として作品に内在化された意図を受けとる最初の読者としての面」から考察を試みようとしている⁽⁴⁴⁾。早川は、こうした立場からの論考を「『覚書』『覚帳』(の)テクスト分析ノート」と副題を添えて⁽⁴⁵⁾、二本の優れた論文として発表しているが⁽⁴⁶⁾、いずれの論文においても、『覚』『覚帳』を、何がしかの歴史的事実や状況を明らかにするための史料として用いるのではなく、その「作品」自体の構造について考察している。この研究姿勢は、早川自身が両史料を「読む」にあたって、その「読む」という立場を徹底的に

問うことよってなされたといえるだろう⁽⁴⁷⁾。その問いを執筆者である金光大神にまで遡りさせて、金光大神を自身と同じく「読む」地平に置くことで、その作品の「内在的な意図」を問う事を試みたのである。

こうした意味において、早川の論考は、「読む」という行為を極限まで追い込んだものであるといえる⁽⁴⁸⁾。しかし、早川の論考においては、「読む」という行為からその議論が発出するため、その手前にある「書く」という行為が徹底的に排除されてしまう。金光大神にとって『覚帳』が「何であるのか」が問われるためには、金光大神における「書く」という行為にまで、その遡行が行われねばならない。また、「書く」と「読む」という行為が金光大神の中でどのような関係性をもっていたのかも問われねばなるまい。次節においては、「書く」という行為を問うに当たって不可避な問題である執筆過程について言及する。

〔執筆過程の複雑さ〕

先の荒木⁽⁴⁹⁾・早川⁽⁵⁰⁾両論考においては、『覚帳』と『覚』との共通点が強調されている。しかし、「書く」という行為の立場からは、『覚帳』と『覚』は、両史料はその性質を大いに異にすることは明らかである。それはすなわち、両史料の執筆過程である。以下に挙げるのは、『覚』書き出し部分である。

【『覚』一】

一 今般天地金乃神様

（お知らせ）
御師来世生神金光大神 生所名仁嘉

（古じ）
古位事 前後共書出しと被仰付

（後筆と）

（何か）

『覚』は、金光大神は神からの「お知らせ」を受け、金光大神が自身の誕生からの出来事（「何か古い事」）を振り返って叙述していったものである。『覚帳』および『覚』には、『覚』の起筆に関する同様の内容の「お知らせ」が記述されており⁵⁰、その記述に「明治七年十月十五日」の日付が付されていることから、『覚』の執筆は少なくともそれ以降にはじめられたといえる。

ただし、『覚』はその執筆の契機となった「お知らせ」を受けた明治七年以降、明治九年までその記述が続いている。そのため、そのすべてが「振り返って」書かれたものではなく、その執筆過程もまた、『覚帳』同様複雑な構造を呈しているといえるが、少なくとも明治七年までの記述に関しては、基本的に過去の自己を回顧して叙述する、自叙伝的な性質を備えているといえよう。

それに対し、『覚帳』は、特に何の断り書きもなく、安政四年十月十三日の記事から突然その記述が始まっている。前述したように、藤井の論考によれば、「執筆開始時点」は慶応三年から明治元年前後にあり、以降はリアルタイムに近い形で書かれたとされているため⁵¹、『覚帳』は、まとめ書きがなされた回顧的記述の段階と、リアルタイムに近い形で書かれた日次の記述という、「執筆開始時点」を画期とした二段階の執筆過程においてなされたといえる。ただし、その期間、文量から鑑みるならば、その大半が後者であるといえ、少なくとも自身の誕生から回顧していく『覚』と比較すれば、『覚帳』は日記のような性質を有するといえるだろう。すなわち、『覚』との相違点を強調するために、あえて思い切った分類をするならば、『覚』は自叙伝的であるのに対し、『覚帳』は日記的であるといえる。

『覚帳』および『覚』が金光大神にとって「何であったのか」を問うに際して、この『覚帳』の「日記的」という特性は、金光大神自身の「書く」「読む」という行為を問う立場に立てば、その問いの在り方自体に疑義を唱えざるをえない。なぜならば、『覚帳』は、慶応三年前以降、その帰幽の直前に至る十六年以上、金光大神の手元にあり、

その都度その都度、「書か」れ、そして「読ま」れたのである。果して、その期間、『覚帳』そのものは、金光大神にとって常に一定の意味を持っていたのだろうか。「何であったのか」という問いに対する回答は、金光大神の『覚帳』の執筆過程の段階によって異なりえるのではないだろうか。

この問いは、「執筆の意図」という当たり前の問いの在り方自体に異なる視角を与ええる。『覚』のごとく、大部分がその一点から執筆がなされるものであれば、「執筆の意図」という視角は有効であるといえるが⁶³⁾、『覚帳』は、書かれるその都度「執筆の意図」が異なりえてしかるべきなのである。『覚帳』に一つの「執筆の意図」を見出そうとする問いの在り方は、あたかも『覚帳』の「書く」という行為にその立脚点があるように見えて、『覚帳』からどのような意図を「読む」ことが出来るのか、という視点からなされているのである⁶⁴⁾。

また、『覚帳』は、まとめ書きによる回顧的記述と日次的記述が「執筆開始時点」により二段階に分けられるとしたが、この「執筆開始時点」という画期自体、問い直されなければなるまい⁶⁵⁾。もしまとめ書きがいくつかの時期に分けて書かれたとすれば、—— 事実、筆致のみに根拠を求めるならば、その画期は安政六年に求められる⁶⁶⁾—— 「執筆開始時点」は最初のまとめ書きがなされた時点を指すべきだろう。その場合、「執筆開始時点」は回顧／日次の画期とはなりえない。また、最初のまとめ書きがなされた段階で、金光大神は『覚帳』の執筆を「意図」していたと果して言えるだろうか。いずれ日次的記述をなそうとしていたといえるだろうか。そのように考えてしまうのは我々が現在の『覚帳』を「読んで」いるからではないだろうか。こうした視点は、金光大神が、最初にまとめ書きされたものを「読む」行為、または、そこから更に「書く」行為を看過しているとはいえないだろうか⁶⁷⁾。

さて、以上のような問題設定を可能にするのは、『覚帳』が、ある一点から書かれたものではない複雑な執筆過程を経ているためであり、「読む」「書く」という行為に目を向けることを促すためであるといえる。次項では、『覚帳』

が、特に「書く」という行為に目を向けられることを可能にする、最大の特性について指摘する。

〔教祖直筆〕

本研究にとって、『覚帳』の最大の特性といえるのは、それが金光大神直筆の史料であるという点、そしてその写真版が教外の研究者でも閲覧が可能であるという点である。この点こそ、『覚帳』をして、「何であるのか」という問いを執筆者にまで遡及することを可能にし、執筆者の「書く」という行為への跳躍を試みる事を促す特性である。

多くの『覚』に関する研究において、もはやそれが自明の事である事によるためか、あまり言及されていないが⁸⁴⁾、『覚』は、現在その原本が所在不明であり、現存するのは金光大神五男の金光宅吉による写本のみである⁸⁵⁾。

それに対し、『覚帳』は教祖直筆の原本が現存しており、その原本は、先述のとおり、金光大神の四男金光菰雄のもとに渡り、その後その子孫によって保管されている。ただし、原本は教外の研究者はもちろん、教団関係者や教団研究所員も閲覧不可能である。しかし、部数は少ないものの、その写真版に翻刻文を付した『金光大神お知らせ事覚帳』が刊行されており、一般信徒はもちろん、教外の研究者でもその閲覧が可能となっているのである。民衆宗教・新宗教の教祖の手による、ここまで大部にわたる直筆史料が写真版で閲覧できる事は非常に稀なことであるといえよう。

さて、『覚』に関しても、写本については『覚帳』同様、その写真版が刊行されているため、その二つの写真版を比較する事が可能である。写真版である『覚帳』と写本である『覚』、その二つを実際に比較してみると両者の間には明白な差異があることが一見してわかる。以下、この二つの相違点を指摘することで、『覚帳』が自筆史料であることの意味合いを、より明確に示していきたい。

『覚』の原本がどのような体裁であったかはやはり知りえないが、写本である『覚』においては、その筆致、筆の勢い、行間、字の大きさが一定であり、非常に丁寧に書かれたことが知れる。また、一頁に収める文量も、十六行前後と安定している。それに対し『覚帳』は、筆致、筆の勢い、行間、字の大きさ、文量が、非常に多様である。丁寧に書かれた部分、心の思うままに勢いよく書かれたと思われる部分、筆のかすが甚だしい部分など、記事、日付によって、その様相は大きく異なる。

この二つの史料の差異は『覚』が写本であることに起因しよう。『覚』がどのような目的をもって書写されたかは定かではなく、推測の域を出ないが、父であり、教祖であり、生神であるところの金光大神が記述したものを書写するにあたって、書写者である金光宅吉には、当然一字一字丁寧に書き写すことが意識的・無意識的に関わらず求められたのだろう。しかしそこでは写すことの丁寧さが意識される一方、その全体にわたる様々な多様性が無意識に排されてしまうのではないだろうか。その様相は両史料の体裁（書かれ方）の差異に現れている。

例えば、それは改行について言える。『覚帳』においては、記事の日付が変わり、日付が新たに付される場合、その記事の間で改行が行われる事が多いのに対して、『覚』においては同じ行の中で異なる日付の記事が書きはじめられることがしばしばある。また『覚帳』『覚』両者とも「同」という字を用いて日付や人物などの省略を行うことがあるが、『覚帳』においては、基本的に省略する語と「同」が帳面上で同じ高さになるように改行を行っているのに対して、『覚』においてはそういったことが意識されず、行の途中に「同」の字が見られることが多い。具体的には、『覚帳』には、「同」の用例は一四三例あるが、省略する語と同じ高さになっている、もしくは、それを意識して書かれたことがえるものは一二〇例見られる。それに対して、『覚』の場合は、一〇〇例中、同じ高さ、もしくは高さを意識したものは三一例のみである。

もう一つは丁の跨ぎについてである。帳面を捲って、帳面の裏に移る場合、『覚帳』は字をかなり小さくしてでも表側におさめようとする傾向があるのに対し、『覚』においては頁をまたいで記事が続くことがしばしばある。具体的にいえば、『覚帳』においては裏表を跨いでの記事は、『覚帳』の本文が記述されている全六五丁中⁶⁰、四七丁目〔93〕—〔94〕と、五六丁目〔111〕—〔112〕の二カ所のみで見られるのに対し、『覚』においては、本文が記述されている九十一丁中、五十六カ所で見られるのである⁶¹。

これらの両書の体裁の違いから、『覚』の書写においては、筆致や体裁を書写することよりも、テキスト自体の内容を一字一字丁寧に写すことに重点が置かれているということがわかる。その結果として、筆致や体裁が排除されてしまうこととなるのである⁶²。

この筆致や体裁の多様性が排され、テキストの内容が重視されるという姿勢は、『覚』を「読む」という行為に重点を置き、「書く」という行為を捨象していくという事に言い換える事が出来よう。その姿勢は、書写者金光宅吉の「読む」という行為、「書く」（書写する）という行為を理解する上で、また、宅吉にとつての金光大神を理解する上では重要な意味を持つといえる。しかし、金光大神自身の「読む」「書く」行為、『覚』とは「何であるのか」という事を問う上では、『覚』が写本であることは、その問題を見えがたくしているといえるだろう。

この書写者の「丁寧さ」の意識は、『覚帳』『覚』を翻刻し、『教典』を編纂した教団と教学研究へと、地続きに繋がっているといえよう。もちろん『教典』編纂の場合、一般信徒に配慮し、読みやすさを重視していることが要因であるともいえる。しかし、その「読みやすさ」という意識こそ、「読む」という行為を重視し、金光大神の「書く」という行為を看過せしめているのである。

また『覚帳』には加筆、修正、記事の削除、貼紙⁶³など、記述後に行われた操作が散見する。筆致などからそれら

の多くは金光大神本人によるものであると考えられるが、『教典』所収の「覚帳」においては、それらは読むにあたって最も適切な形で修正されている。その他、『教典』に収められた「覚帳」「覚書」は、共に漢字や方言など、信徒向けに「読みやすい」ように様々な修正が加えられている。『教典』の「覚帳」は、あくまで解読文である⁶⁴⁾。

無論、『教典』に所収された解読文は、教学・教外に関わらず、大いに参照されるべきであり、本研究においても積極的に『教典』に限らず、様々な教学研究の成果を参照している。しかし、研究者は、『教典』に収められた「覚帳」「覚書」、写本である『覚』、そして直筆史料である『覚帳』、そしてそれぞれの写真版に、それぞれの成立に至る過程を考慮しつつ、「史料」として向かい合わねばならないだろう。翻刻し、テキスト化し、『教典』として刊行されるそれぞれの過程、それぞれの段階でその志向せんとするものにより、「史料」が持つ意味合いや構造は異なりえるのである。そうした「史料」に対する丁寧且つ厳密な姿勢、精確な分析の眼差しこそ、教学の研究成果を利用し、それに応えるために、教外の研究者に求められるべきであろう。

以上のように、『覚帳』は、自筆史料であり、その閲覧が可能な点において、その史料そのものが金光大神にとって「何であるか」を問う事、「書く」という行為、「読む」という行為を問題にする事を可能にできるといえる。

おわりに

以上、本研究における前提として、研究対象である『覚帳』の概要とその特性を指摘した。その論旨は以下の四点到にまとめられるだろう。

① 近年その認知をみた「新しい史料」であり、現在も教学研究において、果してそれが「何であるのか」という問いがなされており、その議論を参照し、参画を試みる事が出来る。

② 教祖金光大神自らが書いたものであるが故に、執筆者と「史料」との間に、他とは比較できない、独自の関係性を見出す事が出来る。

③ その執筆過程が複雑であり、ある一時点から書かれたものではないため、その記述一つ一つから、「書く」「読む」という行為への考察を試みる事が出来る。

④ 直筆史料の写真版が閲覧可能であるため、「書く」という行為に注目することが可能である。

以上の四点から、個別の「宗教的史料」が果して「何であるのか」、という事を徹底的に問わんとする本研究において、『覚帳』は非常に適した研究対象であるといえる。今後は、この前提を踏まえたくうえで、まずは『覚帳』が金光大神にとって果して「何であったのか」という点を、「書く」という次元から考察していきたい⁶⁶⁾。

註

(1) たとえば、本研究が対象としている金光教がカテゴライズされている民衆宗教研究という分野においては、「民衆」にしろ、「宗教」にしろ、そこには研究者が「こう語りたい」という願望が内包されており、そうして形成された「民衆宗教」のイメージが歴史的事実として「語られ」ていく(桂島宣弘「民衆宗教研究・研究史雑考」『日本思想史学』三四号 二〇〇二年)。その「語り」のなかでは、宗教の「不可解さ」は破棄されていき、「理解できるもの」がその中から抽出され、その抽出したもつから、「民衆宗教」像が形成されるのである。

(2) 先に挙げた三者を「宗教現象学者」としてまとめて論述する事には、様々な異論がありえようが、いずれの論者も宗教への還元主義的態度を批判し、宗教の他に還元しえない固有性とその全体的把握を志向した点においては一致するものであると

いえ、本稿においてはその共通点を強調するために、便宜的に「宗教現象学者」とした。

- (3) ヨアキム・ワツハ『宗教の比較研究』一九五九年（渡辺学、保呂篤彦、奥山倫明訳 法蔵館 一九九九年）、G・ファン・デル・レーウ『宗教現象学入門』一九六一年（田丸徳善、大竹みよ子訳 東京大学出版 一九七九年）、ミルチャ・エリアーデ『聖と俗—宗教的なるものの本質について』一九五七年（風間敏夫訳 法政大学出版社 一九六九年）、参照。

- (4) 宗教概念論については磯前順一『近代日本の宗教言説とその系譜』岩波書店 二〇〇三年を参照。同書においては、欧米における宗教概念論に至る研究動向についても言及されている。

- (5) 史料名に付した括弧であるが、本論文においては刊行された写真版『金光大神お知らせ事覚帳』を用いているため、『金光教教典』に所収の「お知らせ事覚帳」と区別する為に、二重鉤括弧を用いて「お知らせ事覚帳」『覚帳』と表記した。原本について言及する場合は、『覚帳』の原本、と表記した。

- (6) 『覚帳』および『覚』の引用については、【】で史料名を示したうえで、それぞれ写真版からの翻刻を行って引用した。史料名に付した数字は、『教典』に付されている章番号と節番号に「」でそれぞれの写真版の頁数を付した。引用にあたっては、『教典』の解読文、それぞれの写真版に付された翻刻文を参考に翻刻を行った。出来る限り原本に近い翻刻を心がけ、漢字は旧字体をそのまま用い、変体仮名に関しても極力そのまま引用した。

- (7) ただし、七十二丁のうち五丁は末暦と呼ばれる金光大神独自の暦と新暦、旧暦の対照表のようなものであり、『教典』には所収されなかったが、写真版『覚帳』には所収されている。また、『お知らせ事覚帳注釈』（金光教本部教庁 一九八九年）以下、『注釈』によれば、『覚帳』原本には金光大神の明治十六年（一八八三年）八月二十一日の最後の記述に続けて、金光宅吉による記述が丁の余白に十九行ほどなされておられ、こちらは写真版『覚帳』には所収されず、『注釈』に「資料」として解読文が所収されている。その他、写真版『覚帳』と原本との相違点については、岩崎繁之「御四被せ事覚帳」（お知らせ事覚帳）の貼紙をめぐって」（『金光教学』第五十二号 二〇一二年）に詳しい。

- (8) 本研究においては金光大神が「お知らせ」を受けた「神」に関して、「神」という語で統一して記述する。金光教の主神は「天地金乃神」であるとされているが、この神は非常に複雑な構造を内包しており、『覚帳』および『覚』においては「天地金乃神」と記述されるほかに、「天地乃神」「天地神」「金乃神」「金神」「鬼門金乃神」など非常に様々な表記のされ方があがる。金光大神の信仰過程においてその神名は異なるともいえ、『覚帳』の表紙に記された「日天四月天四丑寅鬼門金乃神」上八小八百八金神 乃こらづ金神」との神名も、この表紙が書かれた段階での神名であり、『覚帳』『覚』全体に適応できる

- ものではない。『覚帳』『覚』全体にわたって金光大神はその神を単に「神」「神様」と表記している場合が最も多いため、本論文ではその表記に従って「神」とした。
- (9) 「お知らせ」の語について金光大神は「御四らせ」と表記しているが、意義をとりやすくするため、本論文においては「お知らせ」という表記で統一する。
- (10) この記述の主体（＝執筆者）はあくまで金光大神であり、神ではない。すなわち、大本の出口なおによる「御筆先」を例とするような、神憑りの状態での執筆、もしくは神による執筆や自動筆記とは異なる。『覚帳』（および『覚』）本文を見る限り、主語はあくまで「私」であり、「お知らせ」についての多くは「……と御四らせ」「……と被仰付候」という間接話法的な記述形式である。「お知らせ」の内容のみ記述され、直接話法的な記述がなされる場合もあるが、全体を通して、あくまで「お知らせ」を受けた金光大神による記述と考えてよいだろう。この点は、後述する「書く」という行為を問う上でも重要な点である。
- (11) 桂島宣弘「近代における〈宗教化〉体験」高橋文博他編『近代日本の成立』ナカニシヤ出版、二〇〇五年 五頁
- (12) 桂島宣弘『増補改訂版』幕末民衆思想の研究 幕末国学と民衆宗教『有斐閣』二〇〇五年 一六三頁
- (13) 桂島のこの指摘には多少の留意が必要である。桂島は「お知らせ」を「神のコトバ」としている一方で、金光大神を通して語られた「裁伝」もまた「神のコトバ」としている。金光大神に「書かれた」ものである「お知らせ」と、金光大神の口を通して神が「語った」ものである「裁伝」の間には徹底的な相違がありえ、「神のコトバ」という把握の仕方が、この相違点を隠蔽してしまうものであるといえる。すなわち、「神のコトバ」という、その「コトバ」そのものが注視されることによって、それを「書く」という行為、そして「読む」という行為が隠蔽されてしまっているのである。
- (14) 『注釈』によれば、『覚帳』の帳面の最後の部分に、金光大神の五男である金光宅吉（金光四神）の筆で「明治十六年癸未旧十二月二十二日までに金光四神拜見仕り候。品々お知らせ覚え書き付け、先の事、縁談の事あり」と記されている。
- (15) 『覚帳』執筆の意図を、神からの「お知らせ」を記す、という点にだけ求めるのであれば、その執筆のペースの乱れは、神からの「お知らせ」が不定期になされたことに起因するといえる。しかし、同じく金光大神の手による『覚』に、『覚帳』には記述されない「お知らせ」に日付を付したものが散見することから、すべての「お知らせ」体験が記されたわけではないことが考えられる。執筆のペースの問題は、書かれなかった「お知らせ」体験があったこと、また「お知らせ」以外の記述があることを鑑みると、金光大神が『覚帳』に何を書き、何を書かなかったのか、という問題が金光大神にとって『覚

帳」とは何であったのか、という問いの必要性を示唆するといえよう。

(16) 『覚帳』の表紙には、先述した表題を含めて以下のような記述がある。

安政四丁巳年十月十三日

日天四丑

鬼門金乃神大明神様御かけ請

月天四寅 二上八小百八金神乃こらづ金神

御四被世事覚帳

(17) 藤井潔 研究ノート『お知らせ事覚帳』の執筆開始時点に関する考察』『金光教学』第二三号 一九八三年

(18) 金光大神の子は、長男赤沢龜太郎、次男赤沢樞衛門が夭折しているため、金光萩雄は事実上の次男。

(19) 『金光大神覚』解題『金光大神覚』について』によれば、『覚』の名称は、当初「教祖御手記」と呼ばれることがほとんどであったものを、昭和二十二年、教祖伝の根本典籍にするにあたって、「金光大神御覚書」と称した。その後刊行された『金光大神覚』において、「金光大神覚」とその名称が変更されたが、昭和五十八年に『教典』に収められるにあたっては、「金光大神御覚書」との名称にもどされた。本論文においては、『覚帳』同様、刊行された写真版を用いるため、『金光大神覚』の表題にもとづき、『覚』とする。また『教典』収録のものに関しては、『覚帳』の表題「金光大神御覚書」に基づき、「覚書」と略記するものとする。ちなみに、「金光大神御覚書」および「金光大神覚」という呼称は、『覚』執筆の契機となった「お知らせ」である「おやいいつへ（言い伝え）此方じ木手（来て）から之事覚前後共書出し（『覚』22-10 [86]）」によるものと思われる。

(20) 金光教本部教庁『金光大神』金光教本部教庁 一九五三年

(21) 『覚』の存在が教団内で広く認知されたのは明治四十三年、教典編纂委員会に安倍喜三郎によってその抄録が提出されたことによる。その後直信である近藤藤守、佐藤範雄がその原文の書写が許され、教祖伝編纂委員会がそれを更に書写し、資料として用い、次第に教団内で広く知られるようになったという。（前掲『金光大神覚』について）

(22) 『果報』『金光教学』第一号（一九五八年）によれば、一九五五年の段階で、『覚』の公刊に備えての研究が開始されている。

村上重良、安丸良夫校注『日本思想体系六七 民衆宗教の世界』岩波書店 一九七一年。

(24) 金光大神著 村上重良校注『金光大神覚 民衆宗教の聖典・金光教』平凡社 一九七七年。

- (25) 村上重良『近代民衆宗教史の研究』法蔵館 一九五八年／増補訂正版六三年／改訂版七二年、同『金光大神の生涯』講談社 一九七二年、同『教祖―近代日本の宗教改革者たち』読売新聞社 一九七五年など。
- (26) 島蘭進「金光教学と人間教祖論―金光教の発生序説」『筑波大学哲学・思想論集』四号 一九七七年、同「金神・厄年・精霊―赤沢文治の宗教的孤独の生成」『筑波大学哲学・思想論集』五号 一九七九年、同「民族宗教の構造的変動と新宗教―赤沢文治と石鐘講」『筑波大学哲学・思想論集』六号、一九八〇年、同「宗教の近代化―赤沢文治と日柄方位信仰」五来重他編『講座・日本の民族宗教5 民族宗教と社会』弘文堂 一九八〇年。
- (27) 小沢浩「生き神の思想史―日本の近代化と民衆宗教」岩波書店、一九八八年。
- (28) 桂島宣弘『幕末民衆宗教の研究』ペリカン社 一九九二年／文理閣 増補改訂版二〇〇五年。同『思想史の十九世紀―「他者」としての徳川日本』ペリカン社 一九九九年。
- (29) 金光教学研究所は、昭和二九年（一九五四）に、従来金光教学院研究部、および教祖伝記奉修所において進められていた研究および資料などを引き継いで、総合的な教学研究機関として設置された（彙報『金光教学』第一号 一九五八年、および「教学研究年表」『金光教学』第四四号 二〇〇四年、参照）。その研究の成果は、『金光大神覚』『金光教教典』などをはじめとする様々な刊行物と、年刊の紀要である『金光教学』に掲載されてきた膨大な数に及ぶ論文などから窺い知る事ができる。
- (30) 『教学研究会記録要旨』『金光教学』第二十四号 一九八八年 一七八頁（一九八二年十二月十六日・十七日に開催された第二十四回教学研究会の要旨を記録したもの。統一テーマを「覚帳」をどう読むか」と設定している）。
- (31) 前掲桂島『幕末民衆思想の研究』、『思想史の十九世紀』に所収の論文のほか、同「病氣直し」から「教説の時代」へ』『環』十三号 二〇〇三年など。
- (32) ただし、島蘭進は、「文治の生涯、とくに前半生についてわれわれが知りうることの多くは、文治自身による『金光大神覚』（以下「覚」と略す）の記述によっている。『覚』前半生の記述は年を追って「事実」をぼつぼつと書き並べた「記録」であるが、その多くは晩年の文治の記憶に基づき、神との交渉の経過を示すという彼の関心にそって構成されたものであることを忘れてはならない。文治の生涯を叙述するには、『覚』の記述に関する批判的分析が不可欠である」（島蘭進「金光教学と人間教祖論―金光教の発生序説」『筑波大学哲学・思想論集』四号、一九七七年 一〇二頁）として、『覚』という史料自体について言及している。

- (33) 島蘭進「天理教研究史試論―発生過程について」『日本宗教史研究年報』三号 佼成社出版 一九八〇年 七十頁
- (34) 本論文においては、あくまで本研究の問題意識とその前提を提示する事を意図するものであるため、これらの議論については、紙面の関係からも取り上げないが、教学がどのように「覚帳」が「何であるのか」という事を問うてきたかをまとめることは、今後の課題としたい。
- (35) 荒木の論考については、すでに永岡崇「新宗教文化の脱教团的展開―教祖研究の〈作法〉をめぐる」幡鎌一弘編『語られた教祖―近世・近現代の信仰史』（法蔵館 二〇一二年）においてその検討がなされている。永岡は、宗教研究において研究者が経なければならぬ、「技術的な手続き―理論の選択、資料料の選択と批判、先行研究との（無）関係性、用語の選択、修辭上の工夫、それらが生み出す効果」を〈作法〉として位置づけ、個別の研究者の〈作法〉を検討している。その個別の研究者として荒木があげられており、荒木の論考を、「教祖と教団を厳しく分断するものである」とした上で、「自叙伝」を「自叙伝」として、教祖の周縁性を抹消してしまうことなく、読む「ことの可能性」に希望を見出そうとするものだとしている。永岡の指摘については賛同するところであるが、その分断について再度考察するために、本論文では荒木の論考を改めて参照したい。
- (36) 「宗教的自叙伝としての『金光大神御覚書』と『お知らせ事覚帳』―その宗教的意味について―」『金光教学』第二十三号 一九八三年。荒木美智雄著『宗教の創造』法蔵館 一九八七年に「教祖の「聖伝」と「自叙伝」―金光教における「教祖と教団」から」として、また、荒木美智雄『宗教の創造力』講談社学術文庫 二〇〇一年に再録。ここでは初出のものを参照する。
- (37) 前掲荒木一九八三年 六頁
- (38) 『世界宗教史』第一巻「石器時代からエレウシスの密儀まで」に関して日本語訳を行っている。
- (39) Edmund Leach, "Sermons by a Man on a Ladder," in *New York Review Of Books*, 7 on 6, 1996 その他、代表的なエリアーデ批判として、J・A・サライバやJ・Z・スミスなどの人類学的な立場をとる研究者が挙げられる。（佐藤慎太郎「エリアーデ宗教学とその学問的営為―聖なるものの探求と西洋近代―」『宗教研究』七九号 二〇〇五年 参照）
- (40) こうした教祖と信徒・教団の間の明確な区別は、荒木の教祖論に強く関わっている。荒木の論考については、前掲荒木『宗教の創造』、同『民俗宗教としての新宗教』『国学院大学日本文化研究所紀要』六十号 一九八七年、「現代文明のもたらす危機と平和の問題―宗教の人間の立場から―」『平和と宗教』二三号 二〇〇四年などを参照されたい。

- (41) 前掲荒木 一九八三年 一〇頁
- (42) もちろん、自叙伝として刊行されていながらも、他者によって、執筆者の意図に反するものであれ、その意図を汲もうとするものであれ、整理や修正が加えられるという事例もしばしばありえる。しかもその操作が史料の分析によって明らかにしえない場合もありえる。そういつた意味において、純粹な「自叙伝」などありえないものであるといえよう。
- (43) 早川公明「金光大神御覚帳」「お知らせ事覚帳」とレトリック―「覚書」「覚帳」のテクスト分析ノート『金光教学』第二七号 一九八七年 二四頁。
- (44) 同 二四頁
- (45) 早川は、「『覚書』『覚帳』テキスト分析」という手法について、「それら（『覚』および『覚帳』…引用者注）が私達にエクリチュール（文学言語）として与えられてきている言語テキストであることに注目し、それ自体が完結した一つの作品世界であると捉え、その構造や送り手からのメッセージを分析解釈しようとする試み」であると述べている。（前掲「教学研究会記録要旨」一九八八年）。このテキスト分析の方法論に関しては、ロラン・バルトラ、テキスト論者の論考を参照にしている（前掲早川 一九八七年 三二頁）。
- (46) 早川公明「此方」考―『覚書』『覚帳』テキスト分析ノート『金光教学』第二五号 一九八五年、早川前掲 一九八七年
- (47) 早川は、自身が一九八二年に発表した「金乃神社考」（『金光教学』第三二号）においては、『覚帳』を歴史上の一資料として活用していたが、その論文の検討会において指摘を受けたことで、『覚帳』への接し方の捉え直しを迫られたという（前掲「教学研究会記録要旨」一九八八年）。
- (48) ただし、早川自身は、テキスト論者について、「読者の読み行為に力点が置かれ、単に自立的・自律性を説くことを越えている」としており（前掲早川 一九八七年 三二頁）、自身の立脚点はあくまで「作品」の自立的・自律性にあるとしている。しかし、それらが執筆者である金光大神を「読む」立場に置くことで初めて成立するものである以上、その論考の前提は「読む」行為への注視にあるといえるだろう。
- (49) 荒木は『覚帳』を「お知らせ」と身の回りの出来事の単純・簡略な、形式にとらわれない記述、『覚』を家族の背景、自分の誕生から、死の数年前までの人生の物語を語る自叙伝」とその内容を一応区別しているが、「両者は、主として、自分の生活との直接的事実・出来事からなり、年代記的に編まれている。」と共通性と示し、両者の「宗教的自叙伝」としての「宗教的意味」を明かにせんとすることをその論考の目的としている。

(50)

ただし、早川は先に挙げた論文ののちに「『覚書』『覚帳』の執筆当初における視点の相違について」（『金光教学』第二九号 一九八九年）という優れた論考を残しており、なぜ『覚帳』と『覚』が記されることになったのかを「両書の記述上の具体的な相違点に注目しつつ、そこに窺われる視点の相違を探る」ことによって問おうとしている。早川のこうした視点は、本文に挙げた二つの論文が発表される以前から示されている（前掲「教学研究会記録要旨」一九八八年）。しかし、「読む」という行為を徹底したテキスト分析の論考において、『覚』『覚帳』がほぼ同列のものとして考えられていえることは、「書く」という行為を問うことによつてこそ明らかになる点があることを証左するものであるといえる。

(51)

【覚帳】 18-19 [55]

十月十五日

一此方一場立 金光大神生時

おや乃い、つゝい

此方（後筆）「^(来て)」木手からの事 覚

書出し 金神方角

おそれる事 ^(無札)ふれ願断申た

事 神祇信心いゝした事

【覚】 22-10 [172]

十月十五日早々御四らせ 一此方氏子一場立金光大神 生時

おや乃い、つゝい ^(来て) 此方^(来て)木手からの事 覚 前

後共書出し 金神方角おそれる事 ^(無札)ふれ

断申た事 神祇信心いゝした事

(52)

註(3)参照。藤井によれば、「本文のはじまる安政四年十月十三日に関する記述から安政六年にかけての部分、それ以降の記述と比較してみた場合、字句の間隔や行間がほとんど一定していて、連続した筆致での書かれ方がなされている」ため（前掲藤井一九八三年）、この部分に関しては少なくとも確実にまとめ書きがなされたとしている。その上で、年号表記のな

され方、表紙の神名表記、記述量の変化、文章形態の変化などから、藤井は『覚帳』の執筆開始が慶応三年から明治元年初めての頃にはじめられたとし、それまでの記述をまとめ書きがなされたものとしている。

(53) ここで言わんとすることは、あくまで、「一点から書かれたものである」と「読む」にあたって有効であるという意味であり、あくまで「書く」という次元においては、その意図は回収されえない。

(54) このことは、「読む」という立場を徹底した早川の論考について考察することでさらに明らかになるといえるだろう。早川の論考においては、「作者」と「作品」が分離され、「作品」の「内在的な意図」がその研究の前提とされるが、それはすなわち、「内在的な意図」とは、金光大神を「読む」立場におくことよって、始めて成立するものである事を示しているのである。そのため、「読む」行為の事前にある「書く」という次元においては、「内在的な意図」もまた、破棄されざるをえない。それが「内在的な」ものであれ、執筆者に求められるものであれ、「意図」なるものを見出そうとする態度は、あくまで「読む」という次元において成立しうるものだといえよう。

(55) ただし、この問いの前提となっている「回顧的記述」と「日次的記述」の差異はそれほど明確に定義しうるものではない。書かれた対象と「書く」という行為の間の時間差によつて、「回顧的」であるか「日次的」であるかが決まるが、一年の時間差を「回顧的」であるとするならばまだしも、一か月、一週間の時間差を「回顧的」と呼ぶことは果して正しいのだろうか。どこまでその時間差が縮まることで、「日次的」といえるのだろうかまたこの二つの記述の差異を明確にしたとしても、史料からはその時間差を知る事には限界があるといえるため、この問題については今後の課題とせざるをえない。

(56) 註(36)参照

(57) 藤井の論考においても、「読む」という行為への注視が先行しているといえる。藤井は、『覚帳』の執筆について、「先ず、回顧する、という形でその執筆がはじめられたと考えられるわけであるが、記述が進むにつれて、執筆がなされる時点と、記される体験の生じた時点とが徐々に近づき、やがて追いついて、『覚帳』は、金光大神のもとに生起する「お知らせ事」体験に即した形で執筆がなされていったと考えられる」(前掲藤井 一九八三)として、「執筆」という事柄が、あくまで一点からの、均質的な行為としてみなされている。それは現在の完成された『覚帳』を前提にしているためであり、そこに「書く」という行為が捨象されているのである。

(58) 無論、『覚』の史料解題など、言及されている論文、文献などがないわけではないが、『覚』の写本である点を問う論考や、その書写自体を問題とするような研究は、管見ながら今のところ見当たらない。このことは、教学研究が「書く」という行

為に対して、その研究の重きをおいてこなかったことを証左するものであるといえるのではないだろうか。

(59) 写本『覚』の原本の体裁は横十六センチメートル、縦二十四センチメートルの仮和綴じ。表紙は薄茶色、題簽はあるが書名は記されていない。本文はこうぞ紙で、白紙を入れて九十四枚、各紙の隅に枚数が書き込まれている。裏表紙の内側に「大正十三年九月二十日製本 宿老佐藤範雄」とあり、この製本の際に二、三ミリメートルほど三方が裁断されているため、一部紙端の文字が切り落とされている。『覚』は書写されたと思われる部分に続けて、宅吉による八行ほどの書き込みがある。その書き込みによれば、書写は明治二十一年（一八八八年）に行われたとされている。（『金光大神覚について』『覚』）。

(60) 全七二丁ある『覚帳』から、表紙、裏表紙の二丁と、暦が書かれた帳面五丁を除いたもの（前掲『注釈』参照）。尚、丁数を数える際には、表紙を一丁目として数え、（ ）内に、写真版に付された頁数を示した。

(61) ちなみに、別の丁へ移る、丁の跨ぎも同様に調査すると、『覚帳』においては、十六一十七丁目間〔26〕—〔27〕、二二—二三丁目間〔44〕—〔45〕、五二—五三丁目間〔104〕—〔105〕、五五—五六丁目間〔110—111〕、五六—五七丁目間〔112—113〕の五カ所で行われている。『覚』においては、製本前の体裁が定かではなく、半紙の状態で書かれたのか、多少製本された状態で書かれたのかが不明であるため、同様の比較はできない。

(62) これらの違いは『覚帳』と『覚』の原本がそもそもその体裁を大きく異にする事によるものである可能性もあり、より詳細な考察が必要である。しかし、『覚帳』『覚』がともにまとも書きがなされた可能性が高い部分に関しても改行の仕方に相違点が見いだせるため、『覚帳』と『覚』原本の執筆過程や性質の違いによるものとも言えない。

(63) 『覚帳』の貼紙に関する研究として、前掲岩崎二〇一二年が挙げられる。

(64) 『覚』においては翻刻文のほかに解説文が付されており、『教典』に収録された「金光大神御覚書」と近い解説のなされ方がされている。『教典』は研究者に向けられたものではないため、『覚帳』の翻刻・解説に関する凡例が付されていないが、『教典』においても同様の解説のなされ方がされたと思われる。

(65) 「書く」という行為について考察する上で、教学研究の岩崎繁之の研究は大いに参照されるべきである。岩崎は「新暦・旧暦・末暦があらわすもの—二つの日付を分けける金光大神の世界感覚」（『金光教学』第四七号、二〇〇八年）において、執筆者である金光大神を「テキストの中に書かれている記述から照らし返される人物に加え、それらテキストを前に筆をもつ人物のこともある」としており（同七〇頁）、『覚帳』および金光大神が願主について書き留めた「広前歳書帳」の日付の表記に注目し、「そのように記されることが金光大神のどのようなありようを表すものであるのかを資料論的に究明」し

て（同 一〇二頁）、「記されること」自体を問題化しようとしている。また、岩崎は、「墨筆で文字が書き表されることの創造性や想像性、また墨跡を目の当たりにすることを含めた「書く」という体験の時間にまで思いを及ばさずにはいられない」として（前掲岩崎 二〇一二年）、その筆致や体裁を含めた、加筆や貼紙などに関する考察を行っている。本研究においては岩崎の研究を参照しながら、「書く」という行為について、より徹底した考察を試みたい。